

令和6年度
知床国立公園指定60周年記念シンポジウム運営業務
報告書

令和6(2024)年8月

公益財団法人 知床財団

目次

業務概要	1
第1項 シンポジウム前日までの業務.....	3
1. 開催に向けた周知広報.....	3
2. 進行台本等の印刷	5
3. 会場および資機材の準備.....	5
4. 司会者との調整	5
5. プログラムの製作および印刷.....	5
第2項 シンポジウム当日の業務.....	7
1. 会場等の設営	7
2. 当日の進行管理	9
3. シンポジウムの記録.....	10
第3項 シンポジウム終了後の業務.....	40
1. 資材の撤去、清掃.....	40

業務概要

1. 業務名

令和6年度 知床国立公園指定60周年記念シンポジウム運営業務

2. 業務の目的

知床国立公園は1964年6月1日に指定を受け、2024年に指定60周年を迎えた。

この周年を機に「私たちは自然とどう向き合うか～知床らしい良質な自然体験と利用の心得～」をテーマに、自然との向き合い方を改めて議論し、これからの知床国立公園や周辺地域のあり方を考えるシンポジウムを開催する。

本業務は、釧路自然環境事務所の環境省担当官（以下、環境省担当官）と連携して、シンポジウム開催等に必要な運営支援を実施するものである。

3. 業務の実施体制

本業務は、環境省からの請負業務として公益財団法人 知床財団が実施、運営した。

4. 業務実施期間

令和6（2024）年5月17日から令和6（2024）年8月30日

5. 業務内容

仕様書に記載されている業務内容は以下の通りである。

- 1 シンポジウム前日までの業務
- 2 シンポジウム当日の業務
- 3 報告書の提出

第1項. シンポジウム前日までの業務

1. 開催に向けた周知広報

本シンポジウムを開催するにあたり、以下の業務を実施した。なお、講師、司会者、およびファシリテーターの選定にあたっては、環境省担当官と協議の上、最終決定した。

1) シンポジウムにおける基調講演の講師選考

基調講演の講師については、近隣の自然風景について造詣が深く、幅広い層へ高い波及効果が期待できることを考慮し、道東圏内の別海町出身で2024年1月に第170回直木三十五賞を受賞された「河崎秋子」氏に依頼した。

2) シンポジウムにおける司会者の選考

司会者については、地域に造詣が深く、地域での実施実績が豊富なことを考慮し、北海道佐呂間町出身、網走市在住の「山崎ひとみ」氏に依頼した。

3) シンポジウムにおけるファシリテーターの選考

ファシリテーターについては、地域に造詣が深く、地域での実施実績が豊富なことを考慮し、「愛甲哲也」氏に依頼した。愛甲氏は、知床を含む道内各地で調査、研究を行っているほか、知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議委員である。

4) ポスターおよびフライヤーの印刷

シンポジウム開催にあたり周知広報を行うため、ポスターを印刷した。

ポスターおよびフライヤーのデザインは、環境省担当官から提供され、印刷は下記の仕様で行った。

- ・ポスター : A3、片面4色、200部、マットコート紙
- ・フライヤー : A4、片面4色、2,000部、マットコート紙

納品後、環境省担当官の指定に基づき、斜里町および羅臼町の公共施設や観光施設を中心に配布した。

知床国立公園指定60周年 記念シンポジウム



私たちは自然とどう向き合うか

～知床らしい良質な自然体験と利用の心得～

2024年6月1日(土)

14:00～17:00

会場

斜里町公民館 ゆめホール知床 文化ホール

入場無料 定員約500名

基調講演 河崎 秋子氏 (作家)

「100年先まで続く人間と自然のありかたを」

1979年北海道別海町生まれ。2012年「東甌遺事」で第46回北海道新聞文学賞（創作・評論部門）受賞。2014年『颯風の王』で三浦綾子文学賞、同作で2015年度JRA賞馬事文化賞、2019年「肉弾」で第21回大藪春彦賞、2020年「土に墮つ」で第39回新田次郎文学賞、2024年「ともぐい」で第170回直木三十五賞を受賞。他書に『鳩護』『絞め殺しの樹』（直木賞候補作）『鯨の岬』『清浄島』などがある。



新潮社提供

パネルディスカッション

「知床らしさから考える人と自然との距離」

ファシリテーター 愛甲 哲也（北海道大学大学院教授）
パネリスト 河崎 秋子（作家）
秋葉 圭太（公益財団法人 知床財団）
石井 溪人（羅臼高等学校）
森光（株式会社ゴールドウイン取締役専務執行役員）
藍 屏芳（LANTOKO）

主催 知床国立公園60周年・世界遺産20周年記念事業実行委員会（環境省釧路自然環境事務所/林野庁北海道森林管理局/北海道/斜里町/羅臼町）
後援 (株)ゴールドウイン/(株)スノーピーク/(公財)知床財団/知床斜里町観光協会/知床羅臼町観光協会/斜里第一漁業協同組合
ウトロ漁業協同組合/羅臼漁業協同組合/しれとこ斜里農業協同組合/知床ガイド協議会/斜里町自治会連合会/ウトロ地域協議会
斜里山岳会/羅臼山岳会/(一社)知床しゃり/(一財)自然公園財団知床支部/知床ユネスコ協会

お問い合わせ 環境省ウトロ自然保護官事務所 TEL 0152-24-2297

図 1. ポスターおよびフライヤー

2. 進行台本等の印刷

本シンポジウムの実行委員会が作成した進行台本等を印刷し、シンポジウム当日（令和6年6月1日）のリハーサル時に配布した。

3. 会場および資機材

会場は、実行委員会に属する斜里町役場・環境課が手配した「斜里町公民館 ゆめホール知床」内、「文化ホール」（定員 556 名）を利用した。また、会場設営に必要なスピーカー、マイク等の資機材は、ゆめホール知床の資機材を使用した。

4. 司会者との調整

当日の進行に関して、実行委員会及び当日の会場スタッフと5月21日（火）に打合せを実施し、司会者を含め当日の登壇者等の進行の確認を行った。

5. プログラムの製作および印刷

シンポジウムの来場者に対し配布する、当日プログラムのデザイン、レイアウト製作、及び印刷を行った。仕様は、A3 二つ折り（4 頁）、両面フルカラー、印刷部数は 600 部とした。

パネルディスカッション
「知床らしさから考える人と自然との距離」

ファシリテーター



愛甲 哲也 氏 [北海道大学大学院農学研究院教授]
知床世界自然遺産地域科学委員会委員
レクリエーションによる自然環境への影響、自然保護地の管理、公園の設計・管理を研究。知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議委員のほか、大雪山・高士山などの管理や戦略づくりに関わる。

パネリスト



秋葉 圭太 氏 [公益財団法人 知床財団]
公益財団法人知床財団 参事 / 公園事業推進プロジェクトリーダー。
2005年立命館大学大学院修士課程修了後、山梨県庁に勤務。2009年より知床財団に勤務。野生動物の保護管理、知床五湖利用調整地区の創設運用等を経て、2022年より現職。自然保護区におけるツーリズムの価値向上が仕事のテーマ。「入口は観光、出口は保全」がモットー。1981年北海道夕張市生まれ。



石井 深人 氏 [北海道 羅臼高等学校]
北海道深川市出身。羅臼町在住。
深川市の中学校から羅臼高校に進学し、知床半島の探検を通して知床半島の自然について学んでいる。
現在は生徒会長として学校祭運営を行っており、行事の面から学校を魅力的にしようとして取り組んでいる。



森 光 氏 [株式会社ゴールドウイン 取締役 専務執行役員]
東京都出身。神奈川県在住。
信州大学卒。山登りが好きで、大学卒業後、海外での生活なども経て、バタゴニア、PADI、オニール、ブラックダイヤモンドなどのアメリカのアウトドアブランドのビジネスに携わる。2004年にゴールドウインに入社し、ザ・ソース・フェイス事業部に所属。2023年より現職。



藍 屏芳 氏 [LANTOKO 知床生態旅遊 代表]
台湾出身。斜里町在住
台湾で日本語学科、観光学科を卒業後、2014年来日。知床の自然、文化、人々に魅了されて、知床に移住。冬は流氷ウォーク、夏は知床五湖などの露で海外からのお客様に知床の魅力を提供。ツアー以外に SNS 「It's Hokkaido 北海道・道民生活」で北海道の遊び方と知床の日常を提供。

知床国立公園指定 60周年
記念シンポジウム

私たちは自然とどう向き合うか
～知床らしい良質な自然体験と利用の心得～



2024年6月1日 [Sat] 14:00～17:00

会場 斜里町公民館 ゆめホール知床 文化ホール(斜里町)

主催：周年記念事業実行委員会(環境省釧路自然環境事務所、林野庁北海道森林管理局、北海道、斜里町、羅臼町)
後援：(株)ゴールドウイン/(株)スノーピーク/(公財)知床財団/知床斜里町観光協会/知床羅臼町観光協会/斜里第一漁業協同組合/ウトロ漁業協同組合/羅臼漁業協同組合/しれとこ斜里農業協同組合/知床ガイド協業会/斜里町自治会連合会/ウトロ地域協働会/斜里山岳会/羅臼山岳会/(一社)知床しゃり/(一財)自然公園財団知床支部/知床ユネスコ協会

プログラム

基調講演

「100年先まで続く人間と自然のありかたを」

講演者：河崎 秋子 氏

取組発表

環境省 斜里町 羅臼町

パネルディスカッション

「知床らしさから考える人と自然との距離」

ファシリテーター

愛甲 哲也 氏 (北海道大学大学院農学研究院教授)

パネリスト

河崎 秋子 氏 (作家)

秋葉 圭太 氏 (公益財団法人 知床財団)

石井 深人 氏 (北海道 羅臼高等学校)

森 光 氏 (株式会社ゴールドウイン 取締役 専務執行役員)

藍 屏芳 氏 (LANTOKO 知床生態旅遊 代表)

基調講演

「100年先まで続く人間と自然のありかたを」

河崎 秋子 氏 [作家]

1979年北海道斜里町生まれ。
2012年『東海通信』で第46回北海道新設文学賞(創作・評論部門)受賞。2014年『風の丘』で三浦綾子文学賞、同作で2015年度 JRA 賞馬事文化賞。2019年『尚早』で第21回大蔵春彦賞。2020年『土に降りて』で第39回新田次郎文学賞。2024年『とちぐい』で第170回直木三十五賞を受賞。他書に『清原』『絞め殺しの樹』(吉木寛秋補作)『旅の唄』『清浄美』などがある。



総合司会



山崎 ひとみ 氏

[ボイスオブホーツカスカイ チーフアナウンサー]

北海道旭川市出身。旭川市在住。
札幌学院大学卒業後、NHK北見放送局に加入。在局中はFM音楽情報番組DJ・ニュース・地域情報番組等多くの番組を担当。退局後はフリーアナウンサーとして、釧路市内を中心に式典・イベント・各種大会などのアナウンスの他、フォーラム・シンポジウムのコーディネーター、パネリストを務め、現在に至る。

図 2. 当日配布したプログラム (A3 二つ折り、両面カラー)

第2項 シンポジウム当日の業務

1. 会場等の設営

当日の会場設営は、環境省担当官から提示された舞台設営図および配席図に基づき設営を実施した。

会場のステージの上部には、「知床国立公園指定 60 周年記念シンポジウム」と記載した舞台看板を設置し、ステージの演台横には花台を準備した。なお、看板および花台は当日リハーサル時に設置し、シンポジウム終了とともに撤去を行った。

また、会場内には、司会者及び登壇者の控室を設置した。

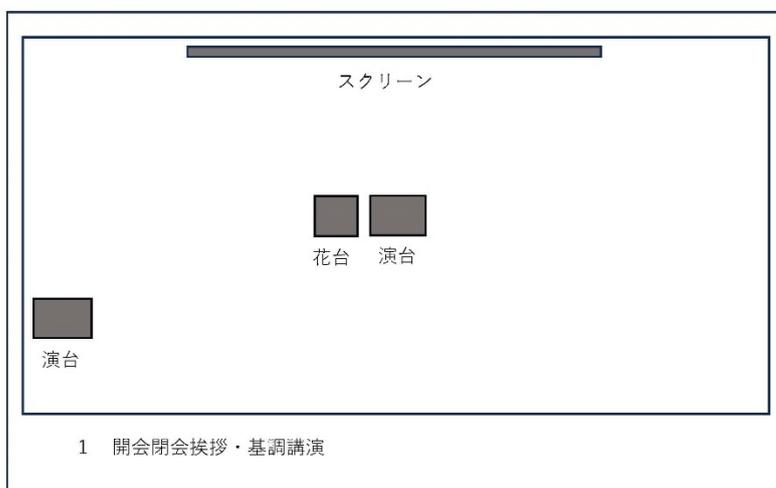


図 3. 開会・閉会挨拶、基調講演時の舞台配置図

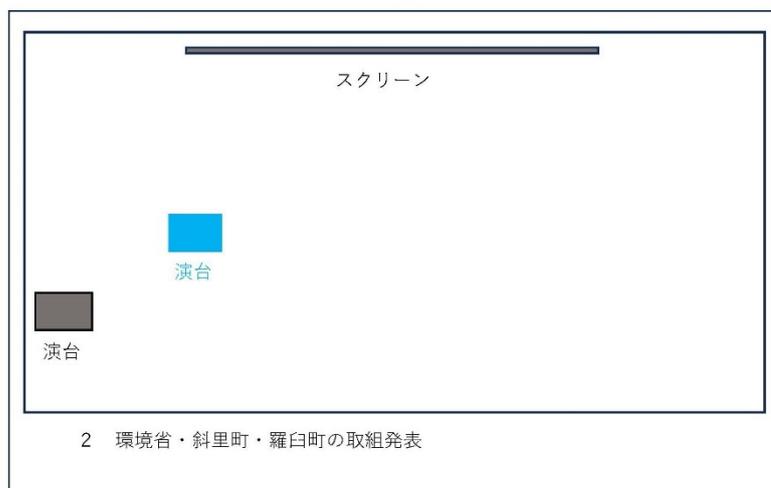


図 4. 環境省、斜里町、羅臼町の取組発表時の舞台配置図

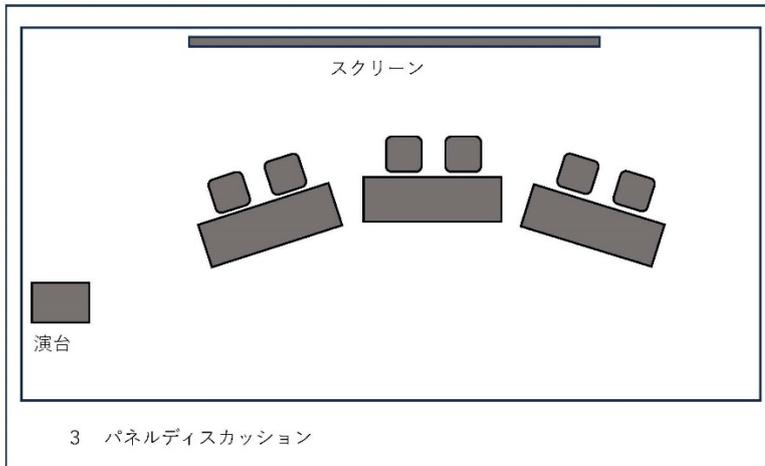


図 5. パネルディスカッション時の舞台配置図



図 6. ステージ上の舞台看板



図 7. 演台横の花台



図 8. 舞台看板、花台、および演台の設置後の様子。

2. 当日の進行管理

当日の進行管理については、実行委員会にて精査された進行台本に従い、リハーサル及び記念式典を進行した。

リハーサルについては、開場前に機器調整、導線の確認、シンポジウム進行の確認を行った。音響機器については、ゆめホール知床の専属スタッフとともに機器調整および進行確認を実施した。

シンポジウム開場前に現地入りする司会者及び登壇者に対しては、控室への誘導、進行についての説明を実施した。また、司会者及び登壇者には、飲料のほか、必要に応じて昼食を手配し、提供した。

開場前、及び開場後は、登壇者や聴講者の安全確保に十分配慮した。

3. シンポジウムの記録

1) シンポジウムの講演内容について

基調講演およびパネルディスカッションについて、以下にその内容を記録した。

i) 河崎 秋子 氏 基調講演 「100年先まで続く人間と自然のありかたを」

皆様こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました河崎秋子と申します。先ほど司会の方からご紹介がありました通り、出身は別海町です。もともと酪農の家に生まれ、つい4~5年前までずっとそこで働いていました。作家というよりは農家のおばちゃんの方が板についているのですが、紆余曲折あってこのような晴れがましい場にお招きいただきました。文章を書くことについてまだまだ修練を積まなければいけないはずのところを、このように皆様の前でお話する機会をいただいてしまい、今かなり緊張しております、時々お聞き苦しい点があろうかと思いますが、どうぞ広いお心でお耳を傾けていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど申しました通り、私は実家が酪農、牛飼いをしております、規模は家族経営なので150頭ぐらいと決して大きなものではありません。牛以外に、私自身は綿羊を10頭から20頭ぐらい飼育していました。肉を販売してちょっとした生活費の足しにしていたのが、徐々に生活の一部になっていきました。肉を出荷するときには、食肉加工場に羊を運んでいくわけですが、もともとは釧路の加工場に通っていたのが、諸事情あってその加工場が閉鎖になってしまい、10年ぐらい前からは東藻琴の加工場に持って行くようになりました。そのため、レストランなどから注文をいただくと自宅の軽トラに生きている状態の羊を積んで、根北峠を越えてオホーツク海側に出て、やたらとまっすぐな道路を東藻琴の加工場に向けてゴトゴトと運んでいました。車で2時間ぐらいでしょうか、別海からさほど離れているわけではないのですが、根北峠を越えたとたんに知床半島の斜里側の天気よさに驚かされることが度々ありました。釧路地区は霧やガスがひどいことが多いのですが、峠を越えて斜里に近づくとスカッと晴れている。そして夏だと気温が高い。わが家のある放牧地ばかりの酪農地帯にはない景色、暖かくて玉ねぎなどの野菜が作られているのを見て、オホーツク海側というはずいぶん豊かなところなのだと思いますながら羊を届けて、帰りは肉になった羊を積んで再びガスのかかった別海町に戻るということをしていました。その際、オホーツク海側で車を止めて振り返ると、晴れた空の下に斜里岳がそびえている。北に目を転じれば、雪をまとったきれいな知床連山が並んでいる。美しい海があって豊かな畑もあって、ここは本当に美しいところだという印象を受けながら、ずっと別海で過ごしていました。

その後、ちょっとしたご縁があり、今は別海町を離れて十勝で分筆稼業をしています。昔のいろいろな出来事を掘り返しながら小説を書いているうちに、明治時代の道東のクマを題材とした話で直木賞なるものを頂戴しました。二年ほど前から文芸誌で連載していたのですが、もちろんその当ても北海道内各地でヒグマが出没していました。皆様もご存じであろう、

標茶町で牛を何頭も殺傷した **OSO18**、前足の幅が **18cm** あったことからこの名がついたようですが、これなどは農家の目線でいうとたいそう悪辣なヒグマで、マスコミも騒ぎ立てました。その後、「ともぐい」という作品が単行本になったのと同じ年に、**OSO18** が捕殺されたことが明らかになりました。そのためか、直木賞受賞に絡めて「**OSO18** についてどう思うか」という取材を数多く受ける羽目になりました。私としては「すみませんが、私はヒグマの専門家ではないので」と言うしかありませんでした。私はハンターの資格を持っていないし、小説の中でヒグマと人の格闘シーンも描いたとはいえ、もちろんヒグマと格闘した経験もありません。この、マスコミからやたらとクマについて聞かれたことを受けて、少し注意深くネットのニュースなどを見ていたところ、**OSO18** に関する情報が、北海道だけではなく全国を対象として配信されている。それに対して、北海道外にお住まいの人たちがクマを撃つこと、クマを駆除すること、クマとの共存といったことについて、実に多様な意見を有していることに驚きを感じました。

実際に「ともぐい」という作品を世に出したところ、読者の方々から「とても怖かった」というご意見のほか、クマに対する様々な思いを感想としていただくことになりました。多分、読者の **99%** は野生のクマと遭遇したことはないと思います。それでもクマというものの怖さ、クマに対して人はどう接するべきなのかといったことについて、驚くほど多様な持論をお寄せいただきました。知床にはヒグマがたくさんいるということは、私も存じております。今回、私の実家がある別海町にもヒグマはいますよ、という話をしようと思っていたら、2週間ぐらい前に育成牧場の牛舎に大切にしまわれている子牛がヒグマに食われた、けがをさせられたというニュースが飛び込んできて、とうとう来たかと思っているところです。別海町の私の実家周りには、ヒグマは今までもいましたが、家畜に手を出したことはありません。実は私は自宅周辺で1回だけヒグマを見たことがありまして、家から **1km** ほど離れたところ、大きな川沿いで、何か大きな黒い塊が道路を横断していく。夏のことでした。知床の方はよくご存じでしょうけれど、夏のヒグマはやせていて、毛もモサモサしておらず、細身に見えます。距離にして **150m** か **200m** だったと思いますが、最初は犬かと思いました。でも、この距離であの大きさの犬はいないだろうと思なおし、そこでようやくヒグマだと気づいたわけです。

それぐらいヒグマは普通に住んでいるのですが、幸いなことに私の実家周りでは家畜が襲われたことはなく、ある意味では共存のような形はできているというお話をさせていただくつもりでしたら、その別海町の牛が襲われたというニュースが飛び込んできた、しかもその場所が私の実家から **30km** も離れていないところ、普通に車移動の距離だったというわけです。今後実家の牛も襲われたらどうしようと思っているのですが、そうやって初めて本当に怖いと考えさせられるわけです。知床にお住まいの方たちも、農業や漁業をお仕事としての方、それ以外の方、様々だとは思いますが、あくまで牛飼いの私、あるいは酪農家としての視点で言わせていただくと、自分が飼っている家畜が野生動物に害されるということは本来あってはならないことで、どうにかしなければなりません。自分の財産、家畜や土

地というのは、理屈抜きで絶対に守らなければならないというのが基本です。ではどうするかと言えば、具体的な被害が出た場合にはハンターさんをお願いするといったことを考えなければならないわけです。ただし、OSO18の事例が示すように、それを他の地域の人たちがどう思うか、もともとヒグマがいた地域を開拓して入植したのだから、ヒグマに何かされても仕方ないじゃないかとおっしゃる人がいる。野生動物が自分の本能に従って肉を得るために牛を襲っただけなので、それで駆除されるのは間違っている、そういった様々な意見が様々な方向から飛び出してくることが予想されるわけです。地元の間、とりわけ地元の農家としては、正直なところ「何を言っているのだ」と言いたくなってしまいうわけですが、もう一つの側面として「野生動物がかわいそう」という思いは、とても人間らしい、シンプルかつ美しいものではあるな、とも思うわけです。と言いますのは、例えばクマがかわいそうだからと見逃してやったとします。それでクマが「見逃してくれてありがとう、じゃあこの牛だけは襲わないでおいてあげる」とはならないわけです。なので、野生動物だとか野生の環境に対して愛を注ぐことができるというのは、人間だけが持つとても美しい機能だと思うのです。ただしその愛は、自然の側から返されることは保障されていないということを、前提として覚えおかなければならないなど、今回のヒグマ騒動に関連して自戒を込めて考えました。

先ほども触れたように、一般の人たち、現地から遠く離れた場所にいる人たちの自然に対する思い入れ、そうしたものを結構感じたわけですが、かつてインターネットのない時代には、地域ごとの事情というものが尊重されていたように思います。今、手元のスマホなりタブレット端末ですぐに共有できる時代、北の地域で今朝発生したことが夕方には南の地域で共有されてしまう現在は、それを前提とした発信の仕方、生き方や口の開き方をしなくてはならなくなってきていると感じます。率直に言って面倒くさい時代になったなあという側面もありつつ、そうは言っても対処しなくてはならない時代です。特に、知床半島、道東の自然を考えると、北海道の中でも貴重な野生動物や自然環境、手つかずの大地が残っているところだからこそ、そこに暮らす人とそれ以外の地域に暮らす人との意見をすり合わせる最前線であると思っています。そこをうまく処理していく、受け入れていく、もしくは人に与えるといった作業を怠っていると、人間気の合わない人というのはどこにでもいるわけなので、不要な波風がたってしまう。本来、自然を守るため、保全するため、共存するために使うはずだったエネルギーを、そういった人間同士の余計な諍いのために使うことになってしまうおそれがある、そのことを私は懸念しています。

ではどうすればよいのか。ここまでは私は牛飼いの娘として、農家のおばちゃんとして話をしてきたわけですが、幸いなことに今は物書きとして生活させていただいており、文章を使って物事を発信していく身ですので、老婆心ながらコツのようなものを少々、私の考えとしてお伝えしたいと思います。

先ほど述べた、人間の気遣いに対して、野生動物は同等に返してはくれないという点についてです。人間同士は言葉というものを有しており、それは人を、あるいは時に野生動物を

守るための武器にもなると私は考えています。大抵の場合、人は言葉を使ってものごとを書き、人に意見を伝え、文章にして残すことができます。特に文章を残すということに関して言えば、文字というものは年代を経ても、10年先でも100年先でも、決して錆びることはありません。そのような言葉というものを使って、どうやって他地域に住む人たちと価値観を共有していくのか、それはとても大きな問題であり、例えば知床で、例えば道東で、例えば全道で、色々なところで今後個々人が対処していかなければならないと考えます。現地の人たちの感情、酪農家であれば自分たちが所有する家畜に害があるか否かというのは、その地域に住んでいることで受ける利益と、自然がすぐ近くにあることで被るかもしれないリスクの両方あるのだということを、そこに住んでいない人たちにある程度知ってもらう必要があると考えています。

話は少しそれますが、私はニュージーランドで綿羊の仕事をしていたことがあります。その時に教わったことの一つに「ストックセンス」というものがあります。「ストック」とは羊の群れのことで、「センス」は感覚です。「群れの感覚」というわけですが、それを人とどうすり合わせていくかというのが「ストックセンス」の考え方なのですが、例えば羊は基本的に臆病なので、人が近づくと逃げます。しかし、集団になると気が大きくなる。羊の群れを右に左に動かしたい場合に、人間がどの距離までどういった方向で近づいていけば、羊が思う方向に動いてくれるか、そういった感覚のことです。これ、実は野生動物にも当てはまるなあと考えていて、身近な例で言いますとキタキツネ、本州から来た人たちは可愛いといますし、お土産物や写真などでもキタキツネの可愛い写真がよく使われています。一方で、地元の方はエキノコックスのことを知っているので、まず触ろうとは思いません。観光客の人は結構な距離まで近づいて、ともすると餌を与えてしまったりするようですが、地元の方は、キタキツネがある程度の距離まで近づいて来たら、自分が逃げるか声を出して追い払う。キタキツネは確かに可愛いと思いますが、地元の方のそういった感覚、センスと、よそから来た人たちの感覚、センスは全く別ものなのです。そして、実際に行動も変わってくる。それはキタキツネだけではなく、農家にとってのシカであったり、フィールドを歩いている人たちのクマへの対処方法であったり、地元に住んで、地元なりの経験を踏まえてのストックセンスがあると思うのです。

それではそのストックセンスをどう言葉として地元以外の人に伝えていくか。第一に、単純な対話が挙げられます。会話を進める過程で、キタキツネに触ってはダメだと伝えることがまず必要だと思います。それは本当にシンプルで、多分一番効率的なやり方ではあるのですが、現地の人というのは他の地域にいる人たちとそうした対話をするには距離があったり、そういった機会がなかったり、手間を惜しんでしまったりということが発生します。従って、物書きの側からすると、二番目の発信ということが重要になってくると考えます。先ほど申し上げた通り、言葉というものは錆びませんので、言葉をうまく使って、例えば SNS なりブログなり、お仕事をされている方は PR や何かで、うまいこと自分たちのストックセンスや自然のあり方、考え方、常識というものを外部の人たちに伝えていくということが必要にな

ります。そういったことを細かく積み上げていくことが一番有効なのではないかと考えてもいます。

ただし、今、ビジネスの場などでPRする、CMを作る、プレゼンテーションをするといったとき、例えば特定の商品を使ってそれを売り出すときに、ストーリーを作れという言い方をよくするんですね。例えばちょっと高級なビールがひと瓶あったとして、それを買ってくれるのはどういった層なのか、それをCMとして売り出すにはどういった物語を作ってそれを受け入れさせるのかっていうことをまず考えるわけです。ビールですと、ご夫婦の特別な日に、そのビールを買ってちょっと楽しく飲みましょう、みたいなCMを作ると受け入れられやすいというような、そういったストーリーを想定するのが一番よいとされているわけです。

ただ、物書きの側から言わせてもらおうと、そのストーリーというのは諸刃の剣みたいなのところがあります。小説などもそうなのですが、ストーリーは作り手が考えた創作物なんですね。そういった創作物の、しかも「こう受け入れられてほしい」と相手側に要望することを前提に作られた物語は、見破られやすいです。商品売り出すという意味であれば、そういった弊害は若干少ないようにも見えるのですが、ちょっとピントがずれたりしてしまいますと、ストーリーの粗（あら）みたいなものが、今の世の中だとたちまちSNS上の炎上につながったりします。具体的な例で言いますと、家族向けの家電製品、これを使うと家事が楽になりますよということで、女優さんがこれを使って「子供たちとゆっくり過ごす時間が作れるわ」みたいなCMを流したとします。すると、今の時代では、なぜ女性が家事をする前提なのか、男性は家事をしないのか、その家電を使うのが女性である理由は何なんだというようなことが、すぐに見透かされてしまいます。私の本業である物語小説でもそれと同じで、こうあって欲しいというストーリーを作り込みすぎると、ばれます。作家の側のあざとさ、読者の方にこう読んでほしいというものを余りにも作り込みすぎると、とてもばれやすくなってしまふというリスクが発生します。具体的に言いますと、このキャラクターはこう動いてほしい、読み手にこういった感想を抱いてほしい、こういった印象を抱いてほしい、物語ではそういった誘導をしていかなければならないわけです。しかし、大体それがばれます。

現実においても、広告だとか発信というものは、それを見た人にどういう感情を持ってほしい、どういった印象を抱いてほしい、それを前提に作られていくわけですが、あまりにもそれを作り込みすぎるとやはりばれるというリスクを伴います。ましてや地元の人が自分たちの考えていることを発信する時には、その方法論を前提にしないほうがよい。ストーリーを作るというよりは、ありのままを伝える、こういうことがあった、それに対して自分たちはこう思ったということ、あくまでありのまま伝えていくこと、その積み重ねが大事なのではないかと思います。例えば、街の近くにクマが出た、自分たちはこう思った、周りの人たちはこう思った、家族はこう思った、こうするべきだと考えている、こういう対処をしないと今後どういったことが発生するといった細かな事実や思ったことを、なるべく素直に読み手に対して届けていくことの積み重ねが、他の地域の人がそれを読んだ際に、この地域

ではこういうことが普通なのだ、この地域では野生動物に対してこういった対処をするのが正解なのだ、その結果として平穏な時代が続いてきているのだという細かい理解を積み重ねることが大事なのではないのでしょうか。

ただし、クマも含め野生動物も日々アップデートされますし、個体差もあります。時代を紐解いていきますと OSO18 のような家畜を襲うクマというのは、実は決して珍しくはありません。仕事柄、北海道の昔の話を掘り起こすことが多いのですが、有名なのは三毛別事件、あとは（福岡大学の）ワンダーフォーゲル部が襲われた事件、実際に人が被害に遭った、複数の人が被害に遭ったという事件以外でも、放牧されていた馬や羊が何頭もクマに殺されてしまったというようなことはあります。そして、殺したクマを捕らえて内臓を開けてみると、本来はトロツとしているはずの胆のうが、食べた家畜の脂でカチカチになっていたというような話が残っているわけです。これなどは、当時の人たちがありのままに残した記録です。そして、昔はこういったことがあったのだということを、現在の私たちはありのまま受けとめています。実際に書かれたことに対して疑いを抱くことに意味はありません。なぜなら、当時の人たちにしたら読み手に対して偽りの記録を残す必要は全くなかったわけですから。後世の人にこう感じて欲しいから、こういうふうにしたという理由は全くないわけです。つまり、作られていないストーリーがそのまま残っているからこそ、今の我々はそのクマの話そのまますべて受けとめることができる。さらに言えば、実際に家畜を襲うようなクマもいれば、人間に害を及ぼさなかったクマもいる。数としては多分後者の方が多いわけで、そうしたクマと共存していたその前の世代の人たちの時代があって、その積み重ねでもって現在があるということ、稀にこういうクマがいたという嘘偽りのない、創作されたストーリーではない事実が残されている。こういった悪いクマが発生しうること、OSO18 のような、あるいは別海町で牛を襲った個体、こちらはまだ見つかってないのでちょっと心配なのですが、そういったクマがまた出てくる、多分それを駆除してもその後も出てくるかもしれない、そういった未来の想定ができるわけです。

去年クマの本を書いたばかりですので、どうしてもクマの話が多くなってしまおうのですが、私も地域的には別海町、標津町を挟んで羅臼の南ですので、知床に近いところに住んでいるといってもよいと思いますが、先ほど言った通りに距離的には少し遠いのと、気候がオホーツク海側とは異なるので、近くて遠いと感じていたところがあります。そのため、仕事がらみで、羅臼や斜里にかつて暮らしていた人たちの話を進んで紐解いたことがありました。全くの偶然なのですが、私の母が「これ、昔の私の知り合いが書いた本なのよ」と手渡してきたのが、知床半島からやや東側の海沿いのところに入植した人の記述でした。詳細は省きますが、どこか遠い地域から家族そろって知床半島つけ根の方の北側に入植したものの、どうもそちらの方では農業をするべく頑張って開拓しても、草も育たず、畑から収穫も得られず、最終的には開拓を断念して違うところに移らざるをえなかったという記録でした。そうか知床って大変なんだ、知床の農業開拓って大変なんだと、そう感じていたのです。

しかしその後、別な文献で知床のことを調べていました。それは開拓ではなく地学の話で

したが、どうも知床連山で昔噴火があったと。噴火があって火砕流があって、イメージしていただくとわかりやすいですけれども、火砕流というのは面的に山すべてを覆うように流れるわけではなくて、筋状に流れてくるわけです。調べ直してみると、入植した人が農業や開拓をあきらめざるをえなかったところというのは、その筋状に溶岩が流れたところだったということが後からわかってきたわけです。改めて現在の地図を見てみると、開拓を断念した場所には今も集落がないのです。しかし、数キロ離れたところには集落ができていて、航空写真を見てみるとちゃんと畑ができています。事実を掘り起こすことによって、当時のこと、当時の人の頑張りにもかかわらず駄目だった理由、そういった事実が表れてくるわけです。私も知床の近所に住んでいるわけですが、複数の文献を当たらないとわからないことというのはあるものだと、その時に非常に身に染みるとともに、自分の日ごろの勉強不足を恥じたものです。ましてや、知床は世界自然遺産に登録されたい、クマがまだたくさんいるらしいというような印象を持っている外部の人たち、彼らが知床のことを知るためには、とても能動的に自分から調べていかないと、知床の真実、知床の現実にはなかなかたどり着けないわけです。ですので、お住まいの方、ブログで発信されている方や PR のお仕事をされている方以外であっても、住民の一人一人が、なるべく他人に伝えられるような自然観を固めておくことが大事なのではないかと思うわけです。それは、大きなことではなくていいのです。先ほども言ったように、クマを始めとして野生動物が人の暮らしの近くに出てきたときに、一体何をすればいいのか、どう対処すべきなのか、どういった価値観を持っているのか、そういったことをそれぞれの人が固めておくことが大事だと思います。

別に、必ず SNS やブログで発信しなければいけないとかいうことではありません。知床にお住まいの方たちは、外の人から見ると本当に宝石のような場所に住んでいる、語るべき物語が実はとてもたくさん埋まっている場所において、そのことを頭の片隅に置いて、それぞれが価値観を固めておくことによって、例えば地域で何か動きがあったときに、自分の意見はこうだよ、他人に何か意見を求められたときに、こういうことなんじゃないだろうか、もしくは他の人や外部の人と意見がぶつかったときに、私はこういうことだと思いますよと議論も進む。そういった細かなことの積み重ねが重要なのではないのでしょうか。

人間が自然を保護していく、知床半島の野生動物を大事にしていく、それは今後 5 年 10 年先の話ではなくて、50 年先 100 年先、あるいはそのさらに先、ずっと長いスパンで考えていかなければならない。もちろん、ごみを出さないとか、それぞれの産業で環境負荷を少なくするとかは前提として、なおかつ知床以外に住む人たちとのコミュニケーション、その人たちに向けた発信、それらを言葉によって固めていく、そうしたことを一步一步進めていかないといけない。そうでないとなかなか大変な時代になっていくのではなからうかと、物書きの立場から、あるいは知床からちょっと離れた別海町の一農家出身者の視点として、思っているわけです。

ところで、別海町にいらしたことがある方、どのくらいおいでですか。あ、結構いらっしやいますね。ちょっと嬉しいです。根北峠を越えてのドライブは距離がありますし、特に冬

は越えづらいので、別海町までいらした方が結構多くいらっしゃるというのは、個人的に嬉しいところではあるのですが、ご存じの通り別海町は酪農地域ですが、漁業の町でもありません。景観的には、斜里町のウトロ方面と共通するところもありますが、海と緑の町です。農家は今、大規模化していかないと生き残っていけない現状があります。特に円安で飼料価格が上がるなど、諸々の逆風にさらされています。人手不足もあります。これ以上は愚痴になるのでやめましょうか。

昔、私の祖父祖母の世代ですと、牛を20頭飼育して子供たちを学校に通わせたという話をよく聞いています。今だと、家族経営の単位として100頭では足りない、200頭あるいは合同会社にして1,000頭2,000頭単位で大規模にやっているところも多くあります。当然ながら、お昼を過ぎて間もない時間帯に恐縮な話ですが、頭数が多ければ排泄物の問題が出てきます。もちろん、昔と違って技術も進んでいますから、分解の過程で出るバイオガスを事業として利用したり、適正に処理したり、有効活用する技術はあるのですが、どちらにせよ処理しなくてはならないわけです。その上、観光客などが見て、緑できれいだなあと思うような酪農地帯、牧草地帯です。あれを保つためには、牛の糞尿を撒かなくてはならないわけです。あまり撒きすぎてもいけないのですが、どうしても溜まってしまう糞尿を処理する意味でも、また肥料としても撒くわけです。当然それは水資源に対して、地下水源に対して多少の負荷をかけるというリスクを伴います。

農家に育った私としても、ちょっと申し訳ない気持ちもありつつ、ある意味、自然を破壊もしくは自然に負荷をかけながらでも産業していかなければならない、生きていかなければならない。農業に対してあまりよくない印象を持っている人からすると、じゃあやらなければいいじゃないかとなってしまう。糞尿を撒いて地下水源に負荷をかけて、牛のげっぷで温暖化を加速させて、それならば牛の肉なんて食べなければいいじゃない、酪農なんて、畜産なんてやらなければいいじゃない、そういった意見が、特に今のSNSの時代、鋭い矢のように投げかけられてしまうようなことも、ごく少数ではあるのですが発生しています。

ですが、産業というのはどうしても地域と切っても切り離せない存在でして、なおかつ人間の活動、特に農業のように人の口に入るものを生産することは、ゼロと百、善と悪には切り分けられないものです。農家として、環境を破壊することは本望ではないし、持続可能な農業への分岐点は常に探しながらやっていかなければならないのですが、だからと言って、環境に負荷をかけるからすべての農業をやめろと、そういった話ではないわけです。地域の経済を回しながらも環境に負荷をかけない、そんな生産を心掛けつつ、酪農の技術を継承したいという次世代、若い世代に対して残していかなければならないものというのは、ゼロと百で切り分けられないほどいっぱいあるわけです。

まして、今の世の中は食物自給率を上げろと言ってみたり、酪農に関して言えば牛乳は余っているから生産を減らせと言ってみたり、バターが足りなくなると、じゃあ牛を増やせばいいじゃないかと言われてたり、まあ色々外部の人から言われるわけですけども、ここにおいでの方はよくご存じの通り、牛ってそういうものじゃない、酪農や農業ってそういうも

のじゃないので、持続的な産業というのは周りから口出しされて有効な部分と、ゼロから百までを求めるような声に耳を貸しては続けていられない。ひいては、経済活動すべてに影響を与えてしまうような側面があるわけです。

先ほど、私が羊を連れて根北峠を越えて、札弦の方に抜けると申し上げました。たまに札弦で温泉に入っていましたが、振り返ると斜里岳があって、とても綺麗な畑がある。海の方、浜小清水まで足を延ばすと、美しい海、魚をとっている船がたくさんあって、道の駅の売店に入れば愛想のよい女性がいて気持ち良く買い物ができる。個人的にはとてもよい印象のある、とても明るい道中だと感じておりました。私は畑作については全くの門外漢ですが、大なり小なり酪農と似た問題、検討すべき点はあるのでしょうし、漁業に関しても、聞く限りでは魚をとりすぎるといった問題も発生していると聞いています。しかし、私は門外漢ですから、そういった問題があることを聞いても、正直なところ口を出す権利はない。口を出す立場にない。ただ、門外漢であっても畑作のお話、漁のお話、そういった知らない話をできることなら聞きたいと思っています。

その場所、地域、とても狭いスケールであっても、知床の人たちから見たら私は外部の人間ですけども、知床国立公園の内側で活動されている方が語る野生動物の話、とても聞きたいと思います。それで面白そうであれば小説のネタにしようと、そういったいやらしい魂胆は少しありますが、それを抜きにしても知りたいと思います。ですので、先ほども申し上げた通り、できれば発信してほしい。もし対話をする機会があれば、どうか外部の私に対して色々なことを教えてほしい、それが科学的に正しいか正しくないか、令和の倫理観において正しいか正しくないか、善か悪か、そういったものとは関係なく、ありのままのお話、感じたことをありのまま、どうぞ教えてほしい、教え合ってほしいと、私は強く感じています。

そういった、現地の人の生の声や考えを与我えていただくことによって、こちらとしても提案ですとか、全く違ったところからの意見を与える、と言ったらおこがましいですが、化学反応のように感じるができる。そして、私から見て全く違う場所のことで、知りたいことがあれば、できる限りのことは私の言葉で言ってみたい、語り合いたい、そう思っています。

物書きとして、私はこれまで北海道の昔の話を書くことが多く、例えば根室の馬の話、十勝の畑作の話、北見のハッカの話を書かせていただきました。数えていくときりがなくらいに、北海道の色々な話を掘り起こして、それを事実そのままに描くわけではないのですが、北海道にお住まいの方がたくさん読んでくださって、感想を寄せてもくださいました。ただ、驚いたことに本州の人たちが意外とそういった話を面白く聞いてくださる。

例えば、先ほど例に挙げた北見のハッカの話です。北見のハッカはとても有名で、北海道の物産を扱う東京のアンテナショップなどでは、とても美味しそうなハッカ風味のチョコレートですとか、ハッカのスプレーなどが置いてあります。北海道のハッカ製品は知名度が高く、本州の人にも人気があるようです。それでハッカの小説を書いて、読者の方から寄せられた感想によれば、ハッカ生産の歴史がこんなに深いものだとは思わなかったと。意外と近

代まで続けられていたこと、今も部分的に続けられていることに驚いた、というようなことでした。その方は、お土産物屋さんなどでハッカの製品を見るたびに北見の歴史を思い出してくださっているそうです。その方はハッカに関する昔のことが知りたくて私の小説を読まれたわけではないと思います。多分、たまたま手に取った物語にそういったことが書かれていたのだと思いますけれども、そういった昔の話が自分の世界に水滴のように投げ込まれ、そこで化学反応が起こって、その方にとっての北海道を見る目、ハッカを見る目が大きく変わった。小説家としましては、できることならお住まいの地域で文章をかいていただき、そこに住んでいる人にしかわからない小説を書いてもらって、できれば文学賞とかに応募してデビューしてくださるととても嬉しいな、と思います。それ以外でも、知床にお住いの方が、地元の人しか知らない、知床に住んでいる人たちの嘘偽りのない感じたこと、思ったこと、事実などを、ストーリーではなく物語として、もしくはフィクション、ノンフィクションとして書いていただければ、私は読者としてとても読みたいと思います。いろんなことを知りたいです。多分それは私だけではなくて、知床の方が思っている以上に、知床の話が聞きたい、そう思っている人がいっぱいいると思います。

まったくの余談なのですが、今回「ともぐい」を出した出版社の担当の方が、わざわざ東京から駆けつけてくださりまして、皆さん、どうぞ拍手を。で、編集部に出張などの予定を書くホワイトボードがあって、そこに「知床」と書いたら、編集部が「わ〜っ」と沸いたと。おそらくお土産を期待されていると思うので、もしよかったら東京で喜ばれそうな知床土産を、私にこっそり教えていただけるとありがたいのですが、それだけ知床の知名度は高いのです。知床に行くんだ、羨ましいなあ、と思われるような環境。私も北海道の間人ではあるのですが、編集部の人たちは結構クールな方が多いので、普段はクールなその人たちが「わ〜っ」となるくらい知床というのは本州の人にとって魅力的に映るんだと、ちょっと驚きを感じたわけです。

私は研究者でも専門家でもないのですが、物書きとして北海道の自然、自然史、知床近辺の小説を題材にするわけですが、これだけ物語としての需要がある、知床の事実を知りたいと思っている人がいっぱいいるということは感じます。ですから、重ねて申し上げますが、皆さんの感じていること、皆さんが常識だと思っていること、他の地域の人たちに対して言いたいこと、そういったものを自分たちの中で固めて、機会があれば他の人と話をなさって、さらに機会があればそれを文字にして発信してください。そういった小さなことの積み重ねによって、この地域全体、もちろん知床の自然だけではなく、人が住む知床、土地としての知床、人が自然とともに生存している場所としての知床、その未来がどんどんよい形として長く続くことにつながるのではないのでしょうか。

私は知床が大好きで、綿羊を連れてくるときも、実は内緒ですが、ちょっと道が工事中だったんだよね、とか家族に言い訳をして、本来の経路から外れたところの道の駅に立ち寄りたり、温泉に行ったりしていました。実家や関係者には内緒にしておいていただきたいのですが、そのくらい知床エリアが好きです。私が今暮らしている地域とは少し違いますが、知

床を愛する知床外部の人間の一人として、どうぞ百年先も千年先も美しいままで、そしてお住まいの人たちが生き生きとされているような、そんな地域として残ってくださることを、地に伏す思いで願っているところです。

つたない言葉ではありますが、これをもちまして基調講演と代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

ii) パネルディスカッション

「私たちは自然とどう向き合うか～知床らしい良質な自然体験と利用の心得～」

ファシリテーター:

愛甲 哲也 氏 北海道大学大学院農学研究員教授

パネリスト:

河崎 秋子 氏 作家／第 170 回直木賞受賞

秋葉 圭太 氏 公益財団法人知床財団 参事・公園事業推進プロジェクトリーダー

石井 溪人 氏 北海道 羅臼高等学校

森 光 氏 株式会社ゴールドウイン 取締役 専務執行役員

藍 屏芳 氏 LANTOKO 知床生態旅遊 代表

<ディスカッション内容>

司会:今日のパネルディスカッションのテーマは、「知床らしさから考える人と自然との距離」です。

このパネルディスカッションに移る前に皆様に配布させていただいておりますアンケート用紙、こちら後程ご協力お願いしたいと思っています。これから行われるパネルディスカッションそしてシンポジウム全体を通しての感想やご意見、知床における自然の利用のあり方、知床らしさについてご記載いただけると幸いです。皆様からいただいたご意見やご感想については、知床世界自然、遺産地域適正利用、そしてエコツーリズム検討会議におきまして、知床エコツーリズム戦略見直しの参考とさせていただきます。皆様のご協力よろしくお願いいたします。

それでは、本日のパネルディスカッション、ステージ上の皆様をご紹介させていただきます。ファシリテーターを務めてくださるのは、北海道大学大学院農学研究院教授の愛甲哲也先生です。

続いて、パネリストの皆様をご紹介します。

舞台向かって左手から基調講演でもお話いただきました河崎秋子先生、株式会社ゴールドウイン取締役執行役員、森光さん、知床でガイド業を営んでいるラントコの藍屏芳さん、羅臼高校生徒会長の石井啓人さん、知床財団参事、秋葉圭太さんです。

ではここからのパネルディスカッションの進行については、ファシリテーターの愛甲先生

をお願いいたします。

愛甲：それではパネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。

改めまして、本日ファシリテーターを務めます北海道大学の愛甲と申します。よろしく願いいたします。まず私の自己紹介を、それから皆さんのお話を伺う前に、私なりにこの60年を簡単に振り返ってみたいと思います。

私自身はこの知床世界自然遺産地域の科学委員会の委員、そしてその中に設けられている適正利用・エコツーリズム検討会議の委員として、様々な会議に参加させていただいたり、知床で調査研究もさせていただいたりしています。要は、この地域に立ち寄らせていただくことも非常に多いわけです。国立公園の研究をしております、その研究の観点からまずちょっと振り返ってみたいと思います。

そもそも、日本で国立公園を作るための法律ができたのが、戦前の1931年です。その後、1934年に最初の国立公園が8つ指定されます。その中には北海道からも阿寒摩周、それから大雪山が含まれていて、この12月にはそれらの国立公園が90周年を迎えます。今年はそういう節目の年を迎える国立公園が多く、利尻礼文サロベツ国立公園が50周年だったりします。

知床は60周年ということで、知床の自然に関心が持たれるようになったのは、網走の道立自然公園と同じ時期に、知床半島の学術調査が行われたことなどがきっかけになっているわけですが、それで1964年に国立公園に指定されます。

同じ時期に指定された国立公園、同じ年に誕生日を迎えるのは南アルプス国立公園です。実はこの2つの国立公園に共通する特徴があります。

その前、1934年に指定された8つの国立公園は、瀬戸内海、雲仙、霧島、阿寒、大雪、日光、中部山岳、阿蘇です。これら最初に指定された国立公園に共通するのは、非常に大きい国立公園だということです。国立公園に指定される前から、温泉があり雄大な風景もあり、日本を代表する観光地であった。そういった観光地を保護することが最初の国立公園指定の目的でした。

それに対して、戦後になると、支笏洞爺や秩父多摩甲斐のように、都市の近郊にあって都市住民の日常的なレクリエーションの場が国立公園に指定されるようになります。

時代によって少しずつ国立公園の指定のされ方は変わります。そして1964年に指定された知床と南アルプス、実は最初に指定された国立公園のように、ものすごく景観的に雄大な風景が広がっているわけではない。もちろん知床の景色は美しいですが、広大な大風景があるわけではない。それよりも、生物多様性や生態系の豊かさというのが非常に重視されて指定されたという特徴があります。

時代はちょうど高度経済成長期、公害問題なども発生して、環境に対する国民の関心が非常に高まった時期です。環境庁が設置されたもの1971年ですから、国民の関心が環境問題に向かっている中だったわけです。そういった時代に指定されたのが知床国立公園で、生態

学などの研究も進み、多様な動植物が住んでいること、貴重な種がいること、そういったことが高く評価されたわけですね。

ただ、この 60 年を振り返りますと、その道のりは決して平たんではなかったと言えます。冒頭、環境副大臣と斜里町長のご挨拶の中にもいくつか出てきましたが、知床 100 平方メートル運動にまつわる土地の問題、1981 年から 1987 年ぐらいにかけては知床の国有林伐採問題も起きた。こちらは全国を揺るがすような大きな問題になり、その後の国有林や保護林の制度を変えるきっかけにもなりました。

実は私の知床との最初の関わり、それは 1987 年です。私は当時大学 2 年生で、1987 年の 2 月に初めて冬の知床に来て、国有林伐採問題の反対派の方々と一緒に、流氷が来ている海岸にテントを張って過ごしました。幌別川上流の森までスキーで行って、伐採される予定の森を見て回ったりもしました。それが最初のきっかけで、木が切られた 4 月には、実は自分がそこに加わることになった経緯は覚えていないのですが、反対派の方々と、こう手をつないで「人間の鎖」を作った経験もあります。

その後も色々な問題や取り組みがあって、知床は 2005 年に世界自然遺産に登録されます。それを契機としてエゾシカの管理、ヒグマの管理、2004 年には、エコツーリズム推進協議会もできて、2011 年に知床五湖の利用調整地区制度が始まります。これは全国的にも非常に先進的な取り組みです。ただ、本当に多くの議論を重ねた。私もその検討の場に加わらせていただきましたが、実に様々な意見を調整しながら、地域の方々と話し合いをしながら、ようやく日本で 2 例目となる利用調整地区制度の策定にこぎつけました。

先ほど斜里町の報告にもありましたが、2019 年に自然公園法が改正され、野生動物へ餌やりや接近、つきまといが規制されることとなります。管理計画の中に具体的に位置付けて規制が始まった。これら知床で取り組まれてきた自然保護上の課題と対応は、日本の他の国立公園にも大きな影響を与えてきました。幸いなことに、私はそれぞれの時期に関わらせていただきました。今、ざっと知床のこれまでの話を振り返りましたが、今日のパネルディスカッションでは前向きな話、この自然とこれからどう付き合っていくかという話をしていきたいと思っています。この中では比較的年齢を重ねている私から、少しだけ昔を振り返らせていただきましたが、ここからは現在の取り組み、そして未来の話をするために、皆さんにお話を伺っていきます。まずは石井さんに羅臼高校の取り組みについてお話を伺います。

石井：皆さんこんにちは。羅臼高校 3 年の石井啓人です。生徒の代表として、羅臼高校の取り組みについて紹介させていただきます。題は「知床で学ぶ羅臼高校」です。羅臼高校はユネスコスクールに属していますが、まず皆さんはユネスコスクールとは何かご存じでしょうか。僕もはじめはわからなかったのですが、ちょっと調べてみました。簡単に言うと、持続可能な開発のための教育、いわゆる SDGs (sustainable development goals) を推進する学校です。若者が世界規模の諸問題に対処できるように、新しい教育内容や手法の開発、そして発展を目指しているのがユネスコスクールです。そんなユネスコスクールには、学びの四本柱

というものがあります。

一つ目に「知ることを学ぶ」、二つ目は「なすことを学ぶ」、三つ目が「人間として生きることを学ぶ」、四つ目が「ともに生きることを学ぶ」です。これはそれぞれ「知識」、「スキル」、「道徳」、「社会性」を学ぶことです。そんなユネスコスクールとして羅臼高校がどんな取り組みをしているのかを今から紹介します。

ユネスコスクールとして、羅臼高校が学んでいることが主に五つです。

一つ目が生物多様性、羅臼の地域特有の自然生態系、二つ目に海洋、三つ目が気候変動、四つ目が世界遺産、無形文化遺産、地域の文化遺産等、最後五つ目に持続可能な生産と消費です。そんな羅臼高校で実際に学べる授業を紹介していきます。一つ目は知床学です。一年次に知床学1を、二年次に知床学2を受講します。知床に生息する生物や、生態系の成り立ちだけでなく、知床の歴史や産業についても学んでいます。知床学では、外部講師をお呼びして授業を行っています。これは実際にビジターセンターに出向いて授業を行っている写真です。

二つ目がワシ学習です。ワシ学習は冬の流氷の時期、3月のクルーズ船に乗って流氷上で悠々と過ごすオジロワシやオオワシを見に行きます。実際にワシを観察し、知床の自然に触れることで学びを深めます。これはその時の集合写真です。

そして、クマ学習では、知床財団の方に来ていただいてヒグマの危険性や共存の仕方について授業をしてもらいます。クマについての理解を、より深めることができます。これはクマ学習の時の写真ですが、僕がクマ学習を受けたときは、ヒグマ対策についてディベートをしました。海洋生物の授業は3年生になると受講できます。ダイビング実習を行うなど、実践的な内容が多く含まれています。国家資格である潜水士を取得することも可能です。これは実際にダイビングを行っている写真です。

次に、羅臼高校の社会環境保全への取り組みです。知床ごみゼロの日は、先日も行い、高校から役場までごみを拾いながら歩きます。知床縦断遠足も同じように、遠足をしながら同時にごみ拾いも行っています。

そして、羅臼町ユネスコスクール研究発表会です。発表会では、幼稚園から小学校、中学校、高校までが一堂に会し、ユネスコスクールとして学んだことを発表し、交流しています。生徒会活動の一部をご紹介します。去年、知床4高校フォーラムへ参加したときの写真です。フォーラムでは主催校を務め、知床のごみ問題について、標津高校、斜里高校、清里高校、羅臼高校の4校でディスカッションをしました。ユネスコの理念に対する理解を深めることができたと思います。

羅臼高校は、羅臼町のイベントへの参加も積極的に行って、地域文化への関心もこのように高めています。います。左の写真が「知床開き」というお祭りで披露した豊漁の舞いの写真です。

右が「ふるさと探検隊」という羅臼町のイベントに羅臼高校生がスタッフとして参加している写真です。

最後にまとめになりますが、羅臼高校には知床の大自然が身近にあるからこそ学べるものがあると僕は思っています。つまり、人と自然との距離が近い。そのため、学びが広がり、成長に繋がることなのではないかと僕は思います。
僕からの発表は以上です。

愛甲：石井さんどうもありがとうございました。
非常に素晴らしい内容の活動で、遠足しながらゴミ拾いをすると。二つの写真は同じイベントのものかと思っていたら、二つ目は遠足の時の写真で、目的は遠足なのですね。「縦断」というとどこからどこまで行くのですか。

石井：3年間で行く場所が違って、去年は春松小学校あたりから羅臼高校まででした。

愛甲：なるほど。歩きながらごみも拾うって、どれだけ偉いんだって気がします。非常に素晴らしいですね。石井さんは深川の出身で、高校から羅臼にこられたということですが、深川の高校で、例えばワシ学習とかクマ学習とか、そもそもないですよね。

石井：そうですね。

愛甲：知床の羅臼高校に進学して、羅臼町に住むようになって3年目ですね。結構なカルチャーショックとか、色々考えることがあったのではないかと思います。その辺について少しお話しいただけますか。

石井：純粹に思いついた感想が、知床ってすごいところだということでした。東京とかに行ったときに「出身地どこ？」って聞かれて、知床って答えられる優越感を最初に感じました。深川にいたときと違うのは、深川にいた時は自然をあまりわかっていなかったと思うんです。なんていうか、子供のころから木登りとかしていましたし、森の中にも平気で突っ込んでいきましたし。でも、こっちに来て最初に思ったのが、自然がすごってこともそうなんですけど、それと同時に、怖って思ったんです。クマとかシカがたくさんいるということももちろんそうなんですけど、普通に存在している原生林だとか森だとかに恐怖を覚えたんです。だけど、それっておかしなことじゃないなと思って。よく考えれば、自然というのは怖いものだと思うんですよ。人の手でコントロールできないものこそが自然だと思うので。自然災害などは特にそうで、地震とか、台風だとか、火山の噴火だとか、予測できないものってやはり怖い。自然は怖い。最近思うのは、人はそういった自然をコントロールしようとしているんじゃないかと思うんです。だから自然がどんどん怖くなくなっていく。僕が羅臼に来て思ったのは、まず自然が怖いということ、次に、自然がどんどんコントロールされていって、世界が全体的に自然を怖がらなくなってきたということ。知床ってとても普遍的

で、昔からずっと残ってきた貴重なところだと思うんです。大げさに言えば理想的な形に限りなく近い姿だと思うんです。その理想の姿、手つかずの自然、恐怖も同時に介在する自然を、僕たちが守らなくちゃっていう価値感みたいなものを、僕は羅臼に来てから見つけることができたかなと思います。

愛甲：ありがとうございます。怖さというのも大事で、それが守ろうという気持ちにも繋がる。そういった感覚ですかね。なるほどそれはそれなかなか体験できないことですね。今日は地元の方が多いので、そんなことは当然だろうと思われるかもしれませんが、私のように札幌という都会に住んでいると、なかなかそういう感覚には至らないので、非常に興味深く感じます。

それでは次に森さんのお話を伺いたいと思います。

森さんは先ほどもご紹介あったように、株式会社ゴールドウインの取締役です。皆さんにお配りしたパンフレットにも略歴が書かれていますが、山登りがお好きで、これまでアウトドアフィッターの会社にずっと勤めてこられたわけですけど、最近は知床でも事業展開されているということです。ご自身の関わり、会社としての関わりも含めて、今どういう活動をされているか、知床の魅力とか価値をどういうふうに見ていらっしゃるか、自己紹介を含めてお話してください。

森：ゴールドウインの森と申します。ゴールドウインという会社は、スポーツとかアウトドアの服や道具を作って販売している会社です。会社を簡単に紹介しますと、ゴールドウインというブランドはもとより、皆さんよくご存じかもしれませんノースフェイスというブランド、それからヨットのセーリングのヘリーハンセンというブランド、ラグビー・ワールドカップで日本代表の赤白のジャージを作っているカンタベリというブランド、競泳のスピードというブランド、そういった海外のブランドもたくさん取り扱っている会社です。

なぜここに東京の企業の人間がいるのかと思われるかもしれませんが、今愛甲先生からご紹介あったように、我々ゴールドウインと斜里町の関わりは6年ぐらい前から始まりまして、そもそものきっかけというのが、知床を拠点として写真撮影もされている、世界的な写真家の石川直樹さんです。石川直樹さんは写真家であると同時に、冒険家でもあります。ノースフェイス・ブランドで長年サポートさせていただいた石川直樹さんが、ノースフェイスもしくはゴールドウインで何か知床と、斜里町と関わりを持ってないだろうかというお話を持ってきてくださいました。それが6年前になります。その話をきっかけに、5年前に知床自然センターにノースフェイス・ヘリーハンセンのダブルネームの店を作りました。

この中にもお店に行かれた方がひよっとしたらいらっしゃるかもしれませんが、世の中の人から、なんで知床なんかに、と言っては失礼ですけど、知床にお店なんか作るのですかという質問を随分されました。我々も地の果て知床にお店を作って成り立つのだろうか、若干の不安もありましたけれども、予想に反して観光客の方だけじゃなくて地元の方から多

大な支援をいただきまして、非常に順調に運営しております。

ただお店を作ったということだけでと、単にこの場所に物を売りに来たのかと思われるのでしょうかけれども、我々はそこで出した利益をなるべく地元の自然保護とか地域の活性化に還元したいと考えておりまして、2021年10月に斜里町と包括連携協定を結ばせていただきました。

協定を結んだことによって、この場で商売をするだけではなく、地元の人たちとの関わりを持てると確信しているような事業をしています。非常に多くのことをしているので、ここで全ては紹介できないのですが、例えばここを拠点にして知床財団の協力で、アウトドア企業や環境活動を中心にした企業の方々を対象に、我々がプロデュースした企業研修を企画したり、我々がサポートしているクライマー、スキーヤーなどのアスリートを一堂に会したサミットを行ったり、大きな取り組みとしましては、斜里町のキャラクターである知床トコさんというキャラクターを使ったグッズ、具体的に言いますとTシャツを作って販売しています。販売に関しても、知床だけではなくて全国で販売しています。全国の直営店とか取扱店で販売してまして、売り上げの一部を知床の自然保護活動、100平方メートル運動や、魚道の整備に寄付しています。これはやはり知床を全国の人に知ってもらいたい、斜里町とトコさんを知ってもらいたいという気持ちとともに、得られた収益の一部を地元の自然保護活動に還元したいという思いからです。金額でお示しするとちょっと偉そうに感じられてしまうかもしれませんが、これまで累積で2,000万円以上を寄付させていただきました。

そういうことで斜里町との取り組みというのは非常に力を入れて推進しているところです。最近では、横にいる藍さんの最初の活動、海のごみ拾い活動に参加しました。そこで感じたのですが、海のごみ、中でも漂着ごみというのは非常に大きな問題になっている。それを一部でもリサイクルできないかということで、漂着したブイをリサイクルして、フリスビーを作って販売するという取り組みも推進しています。これは全国的に珍しいことなのですが、それもここ知床を拠点にしています。

それから環境省とは国立公園のオフィシャルパートナーシップを結んでいます。知床斜里町との包括連携協定だけでなく、知床国立公園に対しての取り組みというものもたくさんしております。今年の秋には、環境省のご協力をいただいて我々ゴールドウイン、ノースフェイスというブランドと、あと斜里町、それから羅臼町、羅臼町と包括連携協定を結んでいるスノーピーク、それから知床財団ということで、環境省、知床財団、羅臼町、斜里町、スノーピークそれから当社ノースフェイスの6者で共同イベントをする予定です。外部の人間ではありますが、この地域にかなり関わっている人間として、今日はお話をさせていただきたいと思っています。

よろしくをお願いします。

愛甲：森さんは知床にいらしたときは、フィールドに出たり山に登ったりされているのですか。それだけ多岐にわたって事業を展開されておいでだと、フィールドに出る時間はないの

かなと思って伺うのですが。

森：私は山が好きで、羅臼岳も登りましたし、去年は斜里岳に登りました。これ2つとも百名山なのです。私は百名山コレクターではないのですが、自分の中で制覇した百名山が2つ増えたのでうれしく思っています。それから斜里岳は、山頂からではないのですが、バックカントリースキーで滑ったことがあります。根北峠からずっとこう上がっていくのですが、ここにこんな雪があるのかと驚くくらい質の良いパウダースノーを滑らせてもらいました。あとは、ウナベツのスキー場も滑りましたし、ウトロスキー場もかなりインパクトのある、ロープ一本だけのリフトがあるスキー場で、そこを滑らせていただいた。知床の自然は、かなりエンジョイさせてもらっています。

愛甲：そういうフィールドの魅力っていうのは、出店する際などに、やはり必要ですよ。

森：そうですね。自然センター内にある、知床ノースフェイス・ヘリーハンセン店のスタッフも皆やりますし、バックカントリースキー、バックカントリースノーボード、中にはこの地域のいわゆるボルダー（岩）を開拓してボルダリングマップを作り、知床のボルダリングエリアを紹介しているスタッフもいます。我々は物を作ったり売ったりするだけでなく、一緒に遊ばないといけない、そうでないと物も売れないということで、楽しませてもらっています。

愛甲：なかなか素晴らしい話です。先ほどの、6者連携で実行するイベントというのは、9月に開催されるのですか。

森：9月14・15日の土日です。これまたなかなか珍しい取り組みで、よく皆さんから言われるのは、競合他社のノースフェイスとスノーピークと一緒にやるっていうのは、非常に珍しいのではないかってことです。羅臼町とスノーピーク、斜里町とゴールドウインということで、包括連携協定を結んだ日にちも1日違いで、スノーピークさんが1日早い10月7日、うちが10月8日。ほぼ同じに協定を結びまして、だったら一緒にやりましょうということになりました。地元の皆様も楽しめると思いますので、ぜひいらしていただければと思います。

愛甲：スノーピークにしるゴールドウインにしる、やはり知床に魅力があつてこそのことだろうなと思います。

では、次は藍さんにお話を伺います。藍さんは台湾のご出身、先ほど控室で伺ったら、かなり南の方の墾丁（ケンティン）の近く、ほぼ南国からこの知床にやっていたとのことでした。今は知床に住んでガイドをなさっておいでとのことですが、知床の魅力とか、なぜこ

ここに惹きつけられたかとか、ご自身で活動されて大事にしたいと思っていることとか、その辺をお話していただければと思います。では、お願いします。

藍：皆さん、台湾出身の藍屏芳です。よろしくお願いします。

私は10年前に初めて知床を訪問、最初は流水ウォークのアルバイトをしました。その時は1ヶ月半の滞在でしたが、ただお客さんとして体験するのではなくて、本気で飽きるまで遊びたいなと思いました。知らないうちに知床の自然や文化、人々に魅了されて、知床に移住しました。

今は海外からのお客さん、台湾とか香港とかのお客さんに流水ウォークと知床五湖などのツアーガイドをしています。

知床には、シーズンによって体験できる魅力が色々あります。10年前に私が初めて知床五湖に来て感じたことだけではなくて、今でもツアー中に、あるいは生活の中で、この原生的で豊かな自然に感動します。

よくお客さんに言われるのは、あなたは毎日この景色を見ているのに、なぜいまだに写真を撮っているのですか、ということです。私はいつも「もちろん綺麗だから」と答えています。

知床は季節や天候によって自然の表情とかが変わりますので、感動も自分自身で体験するべきだと思います。日本でもそうですが、海外のマスコミでは、知床は地の果てとか日本最後の秘境ということで評価されています。そのため、原生的な自然を求めて世界各地から知床に来るお客さんが多数います。昨日案内した台湾出身でアメリカ在住のお客さんも、知床は地の果てとか秘境として紹介されていて、とても有名で、ずっと来たかったのだと言っていました。

今までよく宣伝ポスターとかに使われてきた知床岬の航空写真があります。私個人の考えではありますが、人工的な太陽光パネル群とかがもし造られてしまったら、今までのような秘境感がある岬の写真はもう撮れないと思います。私たちが案内している旅行者たちも、違和感を覚えるだろうと思います。ですので、秘境知床のシンボルとしても岬の景観は自然のままが大事だと考えています。

愛甲：ありがとうございます。やっぱりそういう原生的な自然を求めて、いろんなお客さんが海外からもいらして、その方々も案内されておいでだし、ご自身も毎回、やっぱり写真を撮るんですね。飽きないということですか。

藍：いっぱいストックあります。毎年毎年、増えています。

愛甲：季節によっても大分違いますからね。

藍：知床五湖などは毎日歩いていますが、まだ全然飽きずに撮ります。

愛甲：毎回そういう発見が、たくさんある。非常に素晴らしい場所で、かつ大事にしたい秘境、そしてその景観を大事にしたいということですね。太陽光パネルの話は少ししゃべりにくかったかなと思いながら聞いていましたが、今そのことについてはいろいろな意見があって、議論をしているところです。逆に、今それを藍さんがはっきり自分の考えとして言うてくださって、よかったかなと思います。

それでは次に知床財団の秋葉さんにお話を伺います。秋葉さんは山梨県庁にお勤めだった時期があり、富士山レンジャーのお仕事をされていたと聞いています。2009年からは知床財団にお入りになって、それこそ毎日知床国立公園の中で仕事をされています。そこで、今更かもしれませんが、改めて知床の価値とか魅力を秋葉さんがどう見ていらっしゃるか、考えていらっしゃるか、伺ってみたいと思います。

秋葉：知床財団の秋葉と申します。2009年度からなので、もう15年ぐらい知床で働かせていただいています。知床が国立公園になって60年ということで、その歴史から見たらほんの一部にしか触れていないのだということ、今日改めて感じました。

知床で働くきっかけみたいなのは、もともと山登りなどやっていたので、山に登ってお給料をもらえる仕事があるならこんなによいことはないな、ぐらいの不純な動機でここにきました。なので、いつまでできるかと思っていたのですけれども、始めてみるとやっぱり思っていたものとは違うところもありました。魅力とか価値という意味では、藍さんが言われたような自然の魅力や価値も当然そうなのですが、もう一つ改めて思ったことがあります。ここには原生の自然があると言われますが、それはただ自然に残ったわけではなくて、これを残そうとしてきた人の意思とか思いがあって残ってきているということです。自分もその一員になりたいと思っていますし、逆に言うと自然を守るというのは、単純に触れずにガラスケースに入れるようにして守るものでもないだろうと思うわけです。自然の保護とか保全というのは、自然を保全するのではなくて、自然と人との関わりをどういうふうによい形で守っていくのか、作っていくのか、そういったことが自分の仕事の一部なのかなと思っています。

実際に私が今関わっているのは観光とかツーリズム、それをどうしたらよい形で推進していけるか、もしくは、地域とかコミュニティが元気にやっていけるか、そういったことを考える仕事が多いです。そして、それが将来的に知床を守ることに繋がるだろうと感じています。ですので、この魅力とか価値という意味では、自然そのものは当然ですけれども、先ほど愛甲先生が振り返りをされたように、知床というのは日本全体の国立公園とか保護区の中でも、強い役割を担ってきた、エポックな出来事を経験してきた場所で、ここにある種、新しい自然保護の形とかあり方というものを発信していく場所なのだと思います。そういうエポックが自然に起きる、それは地域の人たちの意思で作ってきたものでもあり、それが他

の保護区に広がっていくみたいところで、そこにチャレンジする面白さがあります。

それは当然地域のためでもあります。ここで取り組んでいるローカルなことは、一地域のことにとどまらず、今世界全体の生物多様性をどう守っていくかということを考えていかなければならない中で、一つのモデルになりえるし、チャレンジでもあるといったことが、自分がここで働く大きなモチベーションになっています。また、人と自然との関係というものを作ってきた知床の歴史や地域の方々は、特にすごく魅力があると感じています。

愛甲：魅力がある場所だからこそ、それを守るために大変な努力が日々なされている。斜里と羅臼の両町、知床財団を始めとして、環境省、林野庁森林管理局、北海道で様々な課題に取り組んでおいでですが、やはり一筋縄ではいかない。知床は非常に先進的な取り組みがされている場所だと私も思っています。国立公園の管理を研究している研究者の私から見ても、知床は本当に飽きない。こんな言い方は失礼かもしれないですけど、常に新しい課題が立ち上がっては、皆さんで話し合いながら何とか解決するというのをやってきている。そういう意味でも非常に魅力的な、それこそ先ほどの基調講演で河崎先生がおっしゃった「物語」、人の経験が詰まっている場所だと思っています。知床財団は斜里町や羅臼町さんと一緒にいろんな取り組みをしまして、特に今、チャレンジできる場があるというお話でしたが、知床財団のもう一つのお仕事に、100 平方メートル運動の森づくり活動、森をどう復元して維持していくかという活動もありますよね。これも全国初のナショナルトラスト運動として始まった。そして、大変な苦勞をしながら全国からお金を寄付してもらって森の復元に取り組んできたと思うのですが、その辺の話も少ししていただけませんか。今、どういう状況で活動されているか、知床の 60 年という節目、知床国立公園の歴史を語る上で欠かせない部分だと私は思っているのですが、いかがでしょう。

秋葉：100 平方メートル運動は、かれこれ 40 年の歴史を刻んできています。歴史を振り返ったときに、知床という場所が、自然を守っていくために皆が一緒にやっていく場所だということが、今はある種的前提、当たり前のことになっていると思うのですが、その最初の道を決めたきっかけはやはり 100 平方メートル運動だったと思います。私どもの仕事もどんどん幅が広がって、私などはかなり本流からずれた仕事もしていますが、100 平方メートル運動の仕事というのは知床財団ができたきっかけでもあり、いまだに続いてきているものもあります。これの何が大事だったかという、開拓跡地の自然を復元していくという考え方です。これは、当時は非常に画期的だったと思います。当時は、日本全体が開発や発展という方に向いていた。全国総合開発計画みたいな国土全体を開発して豊かになっていこうという時代でした。100 平方メートル運動は、あえてその逆を行くことで、自分たちの価値を高めてきた、そういう選択をしたという側面があると思っています。もう一つ、地域の自然を自分たちの意思で守っていく、そこには主体性があるわけですが、ただしそれを自分たちだけで何とかするのでなく、外からたくさんの方の共感を得ることで、応援してくれる大きな力を

得て、今なおこれが続いてきている。多分、外からの支援とか応援がなければ、続けてこれなかったらと思う。そこに、今も次々に発生する課題に取り組んでいく際のヒントがあるのではないかと考えています。主体性を失ってはいけない。

ゴールドウインの森さんが知床に来てくださったときによくお話しするのですが、企業が来て何かやってくれたらすごく地域がよくなるか、そういうものではないと、私はむしろ森さんに言われた気がしています。森さんには、地域の意思を尊重したいのだということをし繰り返していただきました。外から大きな工場が来て、それによって地域が豊かで幸せになるという道もあるのかもしれませんが、やはりその主体性を失ってはいけないということがまず一つ。ただし、それに対して大きな共感を得て、外からの支援やいろいろな知恵、技術もそうだと思いますが、そういったものを受け入れることで補強していく。この両方が、今後も運動を推進していく上で大きな力になるのかなと思っています。

愛甲: 地域の方たち自身が考えて、主体性を持って取り組んでいかなければいけないという点、非常に重要だと思います。

大変お待たせしてしまいましたが、河崎先生にもお話を伺いたく思います。基調講演では素晴らしいお話をいただきました。まさに我々がパネルディスカッションで話そうと思っていたことを、まるで予測していたかのようなお話でした。聞いていくつか気になったキーワードがあります。要は語るべき事実をありのままに、地域の方々がちゃんと固めておくこと、それを外に向かって発信すること、語ることの重要性をご指摘いただきました。それは簡単にできることではないかもしれないが、非常に大事なことだと。知床だとそういうこともできるのかなと思いながら聞いていたのですが、今、例えば石井さんが羅臼高校で活動している、台湾から来た藍さんが知床の魅力を感じて移り住んで、ガイドをしなが魅力を外部に伝えている、そういったお話を聞いて、どうでしょう、河崎さんも道東の自然をテーマに小説はたくさん書かれておいでですが、そんな河崎さんから見ると知床は新しい次の小説のネタになりそうな物語がいっぱいありそうでしょうか。こんなことを作家さんに聞くのは失礼かもしれないですが、今のお話を聞いてどう思われたか、感想も含めて伺いたいと思うのですが、いかがでしょう。

河崎: 基調講演でいろいろな方のありのままのお話を伺いたいと言って、それから1時間もしないうちに今、5人の方それぞれのお立場からのお話を伺うことができ、とても素晴らしいなと思いながら聞いていたところです。

そうですね、それこそ物語になるような、それぞれのお立場のそれぞれが見た知床の姿、それは十分に物語として立ち上がることができるかと思っています。

個人的には、私が書くよりも長い間知床を観察してきた皆さん、もしくはその、何でしょうね知床のものを食べて育ってきた若い世代の方たち、そういう方たちが語ったり綴ったりされた方が、より深く知床に根を張った物語になるのじゃないかなという気がします。

若い世代に丸投げするわけではないですけども、というのは私も書いてみたいなと思いつつ、懐が広すぎてどこから調べようみたいなのところはありますね。それだけ例えば一つの、先ほどおっしゃっていた知床の森の保全一つに関しましても、いろいろな意見がある。いろいろな立場がある。いろいろな切り取り方がある。それは、物語として立ち上げるとするととても多角的なものになりますので、とても複雑な、準備の長くかかる物語になるだろうということを、何となく予感します。

それは、知床の風土というものの懐が広い、根を張る余裕がある、そういった深い土地だというふうに思っています。もちろんそれは自然が豊かであるということと同時に、住んでいる皆様のそれぞれの思いが深い、思いをはせるその範囲が広い、絡み合う深度が深い、そういった複雑な要素があるだろうなと思います。5年後10年後であっても、例えば50年後とかであっても、何かとんでもない物語ができそうな気はしますね。

愛甲：大変無茶なお話をお願いしたような気がしますが、今日は会場に高校生もいっぱいいらしてますが、そういえば今日この壇上にいるのは、河崎さん以外は道東外からいらした方なんですよね。こういう言い方をするのはなんですが、会場には地元の方がいっぱいいらしてますが、壇上には知床で生まれ育った人がいない。私も、北海道出身じゃなくて九州の鹿児島出身なので、偉そうに知床のことを語るなど言われるかもしれないですけど、だからこそ逆にわかるというか、興味を持つというか、そういう部分もあるのかなと思ったりもします。また、外から来た人が見るのと地元の人が見るのと、またちょっと違いますよね。同じものを見ていたとしても。そういうところもあるのかなと思って聞いていました。

次はちょっと話を変えて、今の課題、それをこれからどうしていこうかという話を、残りの時間で少しさせていただこうと思います。秋葉さんから簡単に現状をお話いただけますか。知床はエコツーリズムの先進地でもあるわけですけど、今いろいろな課題があると思います。ヒグマの問題だったり、カムイワッカだったり、外から多くの方々が来て楽しんでいただいている一方でどういう課題があるか、日常の業務の中で感じておいでのことなども含めてお話いただけますか。

秋葉：細かく話すと時間がかかるので、簡単に私の印象でお話しさせていただきます。今、国立公園全体の観光を盛り上げていこうという全国的な動きがあります。それは国策の一つでもありますので、地域ではコントロールできないところがあります。特にコロナが明けてから外国の方が大勢いらっしゃるなど、状況が大きく変わっているという実感があります。当然ながら、その多くが知床の自然や、自然をベースにした体験を目的にいらっしゃるわけですが、一方で知床の自然は非常に厳しい面もあります。もちろん、守っていかなきゃならないという中で、実は利用できる場所やコンテンツが非常に限定されている現状があります。色々な方が色々な体験を求めて知床にいらっしゃるけれども、それに合う、求めている体験ができるようなフィールドとかコンテンツなどが十分にあるかということ、遺産登録されて20

年が経ちますけれども、あまり変わっていないんじゃないかという気はしています。

私自身は知床の保護や保全というものを考えながらも、国立公園とか世界自然遺産というのは、やはり直接体験できるもの、触れられるものじゃないといけないと思っていますので、今後そういうフィールドをどう作っていくかというところが一つ大きな課題としてあると思っています。一方で、利用できる場所なり機会なりができたからと言って、何でもかんでもやってよいということにはならないともっています。知床は非常に自然の厳しい場所、典型的なものにヒグマやアクティビティ中の事故などがありますが、それらのリスクとどう向き合うのか。観光とかレクリエーション、それら利用とリスクをどう両立するのかというのが、大きなテーマになってくると思います。その際に必ず出てくるのは、今日のテーマにもなっていますが、ルールみたいなものをどう扱うのか、どう運用していくのかということ、それが課題になってくるわけです。

私は、世界自然遺産や国立公園で行われる観光とかレクリエーションというものには、ルールがあって当たり前だと思っています。他の地域でやっている観光と、私たちがやろうとしている観光、何が違うかといったときに、決定的な違いはきちんとしたルールがあるということで、むしろそれは必須の条件だと思います。そのことをきちんと利用者の皆さんに受け入れていただくために、どう伝えていくのか、どう運用していくのか、それが大きな課題だと思っています。

フィールドとリスクとルール、この三つをどううまく折り合いをつけるかが、今後の知床の自然体験、レクリエーションを考える上でカギになるかなと、まあ私自身が知床にきて10年余り、ずっとこれに取り組んできたように思います。

愛甲：原生的な自然があるからこそ、そこに人が入る際にはリスクを伴うし、リスクをコントロールするためにはルールも必要だし、自然に対して人がどのぐらいの距離をとるべきかという問題なのだろうと思います。

藍さんに伺います。普段からお客さんを連れて自然の中に入って行かれるわけですが、その時にフィールドでのルールだったり、動物や自然との距離だったり、そうしたものについてはどうお考えですか。

藍：私のツアーでは豊かな自然についてお話するだけではなくて、電気柵とかヒグマとの間に保つべき距離、知床に住んでいる人達はどのような努力をしているか、といったことを話しています。特に旅行者には、ヒグマとの安全な距離をとることが一番大事だと伝えたいですね。ここ数年、クマが道路の近くに出ているとき、危険を認識しておらず、車から降りてクマがいる方に近づく旅行者をよく見かけます。クマに近づくために川に降りていく人も去年の夏に見ました。日本人にも外国人にもいます。私はそういう時、危ないですよと声を掛けますが、今言っていたようなルールとか、何かよい方法はないかとずっと悩んでいます。ヒグマを見たいから知床にくるというお客さんの気持ちは十分わかります。今 SNS を見ると

「知床」「ヒグマ」「道路」などで検索すると、YouTubeでの再生回数が1万回超などというものはざらにあります。でも、その動画を撮影するのにちゃんと距離を保っているかは疑わしい。さらに、それを見た人が「これくらいの距離でOKなんだ」と思ってしまうこと、その人が知床に来た時に近くまで寄ってしまうかもしれないことを思うと、とても怖いと思います。

知床では、道路の近くに出てくるヒグマに影響がないように、野生のヒグマを観察できるような場所を、今後作れないだろうかと考えています。例えば岩尾別の方に電気柵で囲われた観察エリアを作ったらどうだろう、ヒグマを見たい人はその中に入って待つことができたらいのじゃないか、といったことです。何時間待っても見られないかもしれない、でも知床は観光ウェルカムという考えで、クマにも人にも安全な場所を提供するということです。そこ以外では、車から降りないでくださいというルール、それ以外にも課題解決の道はあるように思います。私一人で考えるのではなく、たくさんの方の知恵で解決できるのじゃないかと考えています。

愛甲：ガイドさんとしてはその辺はご苦労されているところだと思います。

続いて石井さんに伺います。先ほど自然は怖いものだというお話をされました。知床にはたくさんの方が訪れますが、どういうことを伝えたいと思われませんか。

石井：今の若い人たちは、自然に対する関心とカリスペクトが、昔の人に比べて少なくなっていると思います。インターネットの普及が進んで、小学生でもみんなスマホを持っている。そうなるとう必然的に自然に興味や関心がなくなってきてしまうと思うんです。知床に来て、そういう人たちに知床の自然を感じてもらって、さっき言ったように畏怖の念を感じてもらいたいです。そのためにも、知床の自然が素晴らしいものだったり美しいものだったりということをもっと知ってほしいので、僕個人としては、例えばSNSで知床の自然をもっと拡散したりアクティビティを増やして紹介したりしたいと思っています。もちろん、そうすることによるデメリットもあると思うので、どうやったら知床の自然をSNS上でエンターテインメントに昇華できるかがポイントになるんじゃないかと思っています。

愛甲：やはり我々の世代とは違ってSNSが登場しますね。藍さんもさっきYouTubeの話为例に話されていました。確かに、ちゃんと距離を取って観察をしていますとか、そういったよい例はどんどんよい評価をつける、逆に駄目なものには「それ駄目なんじゃないの」という評価をする、そういったことも大事ですね。特に、外から来た人には何がよくて何がよくないのか、なかなかわからない。現地に来たことがなければわからないけれども、そういうのを使えば、もっとわかりやすくなるってことですかね。

石井：そうですね。秋葉さんもルールを定めるのが大事だと言っておられましたが、ルール

を決めて、距離をしっかりと取って、かつ来た観光客みんなに楽しんでもらう。それによって、より多くの人に知床のすばらしさを知ってもらって、自然環境の利用の活性化ができれば理想的だと思います。

愛甲：森さんに伺います。いろんな取り組みをされていて、知床での取り組みを外に向けて紹介していらっしゃるわけですが、ゴールドウインさんが発信した情報を受け取った方が全国にいらっしゃるわけですね。先ほどおっしゃっていたfrisbeeは全国で買えるのですか。それとも知床でしか買えないのですか。

森：全国で買えます。

愛甲：それには、知床で拾った海ごみから作ったfrisbeeですという情報が入るのですか。

森：そうです。

愛甲：なるほど。そうすると、知床の情報が発信されて、そこから興味を持って、知床に来てみたいとかいう人がまた出てくることに繋がるわけですが、そういうときにどういうことを伝えていけばよいのか、ここまでヒグマとの距離とかリスクの話とかが出ましたけど、その辺はどういうふうを考えていらっしゃいますか。

森：物を売ることによって知床の魅力を伝えるというのは、実はなかなか難しいのです。例えば、frisbeeは知床の海のごみからできていますという、ちょっとした情報で知床を知るきっかけになってほしかったり、先ほども触れた知床トコさんを使った製品というのは、知床だけではなくて日本全国で売っていますから、知床トコさんを知らない方も買われるわけですが、知床トコさんというキャラクターだと知ることによって、知床を知るきっかけになればいいなと思っています。ただ、その方たちに知床のルールやリスクを伝えるということまでは難しいのかなと思います。先ほども言いましたように、知床国立公園とオフィシャルパートナーシップを結ぶことによって知床国立公園の利用と保護に協力しているわけですが、知床の魅力というのは、この圧倒的な大自然、これはもう間違いないことです。これは別に日本だけじゃなくて世界的に見ても有数の自然だと思うわけですが、リスクの問題、この圧倒的な大自然を気軽に楽しめるレジャー的な利用というのがあって、利用に際してリスクはゼロに近づけたほうが良いとは思っているものの、アウトドアスポーツをやる人というのは、リスクがゼロだったら面白くないわけです。リスクがあるから面白い。

先ほどよい例が出たところですが、カムイワッカの滝における取り組み、私は英断だと思っています。あそこは落石のリスクがある、それでもちゃんと準備して楽しもうっていうのは、これは本当に知床ならではの取り組みだと思います。リスクがあるからやるのをやめようじゃなく

て、リスクはあるけどちゃんと準備してやりましょうと。リスクに関してはちゃんと準備するけれども、大自然を楽しむためにはリスクはつきもので、100%安全じゃないってことをわかった上で、楽しめる場所だと思っているわけですね。

それから、一番大きな要素はヒグマです。これは本州でも最近クマの問題が出てきていますが、本州で山登りするときって、あまりクマの恐怖は感じないのです。ただ、私も斜里岳とか羅臼岳に登ったときは、遭遇するのじゃないかという緊張感は常にありました。両方とも遭遇しなかったんですけども、緊張感は常にあるわけで、それはここ知床の自然を楽しむときの非常に大きな魅力だと私は思っています。なので、ここに来る人に対してリスクをきちんと伝えるっていうのは、非常に重要なことだなと思っています。

愛甲：重要な観点のお話だったと思います。

最後に、河崎さんにもう一度お話を伺いたいと思います。先ほどの講演を聞いていて私が気になったワードの一つに「ストックセンス」があります。ああなるほど、そういう言葉があるんだと。羊の群れと人との、距離の取り方のことだと思います。今、クマの話とか、アクティビティのリスクといった話をしているわけですけど、河崎さんは動物の話もいろいろ書いておいでですが、人と自然が向き合うとき、ヒグマに限らず、どういった距離感が適切かなんていう話を聞くべきじゃないかもしれませんが、その辺に対してどういう感覚を持ってらっしゃいますか。ご自身が羊を飼ったり牛を飼ったり、散歩中にヒグマを見つけたときの感覚とか、その辺のお話でも構わないのですが、伺えますか。

河崎：農家側の人間なので、自分の畑の草を食べてしまうエゾシカに関しては完全駆除したいぐらいです。それでも、うちの畑に害を及ぼさないシカは別にどうでもいいと言っただけなんですけれども、結局その人間の生活、経済活動と利益は不可分なので、自分に害があるかないかが一つの分水嶺になると思います。例えばシカに関してはそうなんですけども、ヒグマに関しては、そこにいるけれどもうちの牧場に関して言えば、害を及ぼさない。ただ、怖いことは私も知っているわけです。去年の話なのですが、実は私、キャンプが割と好きで一人で出かけたりするんですけど、十勝の川沿いのいかにもヒグマが来そうなキャンプ場、河原にあるキャンプ場で、今日は空いていていいなと思ったら、私一人だったんです。一晩、そこで一人で過ごさなくてはいけないという状況になった。ヒグマが来るといった警告はないところでしたが、今までヒグマの怖い話、ヒグマに人が襲われた話、ヒグマの生態に関する話などを聞いていたために、さっき言ったストックセンスがちょっと過剰なぐらい発動してしまって、距離をとる判断をしました。つまり、肉だけ焼いて食べ、速攻でテントを撤収して、でも予約を取ったから家に帰るのはもったいないと思い、車中泊したわけです。

多分そこまでやらなくてもヒグマは現れなかったと思います。でも、情報によってリスクが1%かもしれない、0.1%かもしれないけれども、自分の命に係わる、致命的なことになりうると思えば、単純に私がビビリなだけかもしれませんが、そういった防衛的な行動をとる

わけです。

ただ、先ほども言った通り人間は言葉で理解し合うし、情報を伝達し合いますので、たとえそのクマに対する距離感というものが人それぞれ、ストックセンスが人それぞれであっても、そういった情報を共有することで、それぞれの人なりの、例えばツアー、例えばフィールド、例えばアクティビティ、そういったもののリスクヘッジ、少なくとも自分のストックセンスの責任というものは取れるのではないかなと、皆さんのお話を伺いながら考えていました。

愛甲：私もかなりのビビリではあるのですが、多分そのビビリが大切なのであって、それがないとやばいと思うんですね。そういうセンスを磨くことが大事なのだろうと、お話を伺いながら思いました。

もう少し皆さんのお話を伺いたかったのですが、時間になってしまいました。パネルディスカッションはここまでにしたいと思います。

秋葉さんからお話しいただいたように、課題はまだまだありますし、藍さんからの問題提起もありました。

最後に私から一言お話ししておきたいのは、「知床の自然保護」という知床博物館が出している本があります。その中で、元博物館長の中川元氏が書かれた言葉を紹介します。知床というのは、これまで様々な課題があったけれど、情報共有して、幅広い議論をしていくことが大事で、それで新しい課題も乗り切っていけるだろうと書いていらっしゃる。私は今回このパネルディスカッションのファシリテーターを務めるにあたって、もう一度読み直してみたいのですが、これは重要なことだなと改めて思った次第です。課題はこれからも多分出てくると思います。今、国立公園指定から 60 年ですが、今後 70 年 80 年と経ていくにつれて自然保護上の課題は質を変えて出てくると思います。その時に、いろいろな知識を共有したり、広く皆さんで議論したりすることで乗り越えていく、そういうことができる場所でもあるんじゃないかと。今日、皆さんの話を聞いて思いました。特に石井さんみたいな若い方の活動もありますから、期待していきたいと思います。

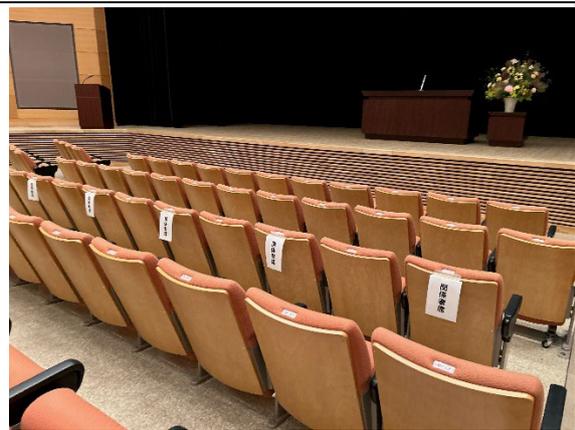
では皆さん、本当に今日はありがとうございました。

2) シンポジウム当日の記録 (写真)

当日の写真については、別途 DVD に格納した。そのうち、数点を以下に記載する。



設営したステージ上部看板および花台。



来賓席の設置。



シンポジウム開場時の様子。



会場入口に設置した周年ポスター。



会場内の様子。



環境副大臣による挨拶時の様子。



河崎氏による基調講演の様子。



神田書店による河崎氏の書籍販売。



パネルディスカッションの様子。



シンポジウム後のサイン会の様子。

- 3) シンポジウム当日の動画撮影
当日の動画については、別途 DVD へ格納した。

第3項 シンポジウム終了後の業務

1. 資材の撤去、清掃

シンポジウム終了後、搬入した資材の撤去、および使用した会場の清掃等片づけを実施した。

また、司会者及び登壇者に対して、旅費及び謝金の支払いを行った。

2. 報告書の作成

シンポジウム終了後、記録した写真や動画、講演内容のテキストをまとめるとともに、本報告書を作成した。

令和6年度 環境省請負業務

事業名：知床国立公園指定60周年記念シンポジウム運営業務

事業期間：令和6（2024）年5月17日～令和6（2024）年8月30日

事業実施者：公益財団法人 知床財団

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別531
知床自然センター内



リサイクル適性の表示：印刷用の紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料 [A ランク] のみを用いて作成しています。